

田代 幹基「年金の制度間不公平とその対策について ～国民年金と厚生年金の比較～」

2～3年前は国民年金の帳簿改ざん事件で社会保険庁が大揺れに揺れましたが、最近では国民年金と厚生年金の一元化が議論されています。

第一次産業や自営業の人口が激減する半面、給与所得者が圧倒的多数を占めるようになり、また高齢化が進んで、年金制度が始まった時代と現在とでは、年金のよって立つ人口構成が様変わりしました。その結果、国民年金と厚生年金の格差はあまりにも大きくなり、年金そのものの制度疲労が誰の目にもはっきりしてきたのです。

田代さんは、身近にいるお年寄りが受け取っている年金の額に、大きな格差があることに疑問を抱きました。一方は、保険料が高いのに、もらえる年金が少ない。他方は、保険料が安いのに、もらえる年金が多い。明らかな矛盾ですね。

田代さんが、身近にいるお年寄りにインタビューしたことは、年金問題を身近に感じるうえでとても有効な方法だったと思います。学生にとっては、年金をもらうまでにまだかなり長い時間があるので、それほど切実な問題として実感しにくいでしょう。単なる金額の多寡というよりも、お年寄りの実生活と結びつけて年金問題を捉えることで、生きた学習ができたと思います。

ただ、年金問題の対策として、一元化だけがあるわけではありません。保険料の未納率が年々上昇して世代間の相互扶助が成り立たなくなっているのは、貧困化があるためです。また、25年間保険料を払い続けないと、年金を受け取ることができません。保険料納付期間が短かったために、年金を受け取れない人々も少なからずいます。中小企業が人件費削減のために従業員の年金保険料を支払わないケースも後を絶ちません。年金問題は貧困問題や社会保険制度全般とも深く結びついていますので、必ずしも、表面的に制度を変えれば解決するというものではないでしょう。

年金問題は根が深いので、もっと視野を広げて考えてもらえればと願っています。